

【論文】

1892年遠山郷秋葉街道を行く人々 —「明治貳拾五年 宿泊人名簿」を読む—

磯前 睦子

I はじめに

南信州遠山郷の旧八重河内村で馬宿を営んでいた家に、「明治貳拾五年壺月改正 宿泊人名簿 八重河内村 山崎東次郎」と表紙に記された1冊の宿帳(写真1)が残されていた。

遠山郷には信州と遠州を結ぶ秋葉街道が通り、江戸時代から昭和初期にかけて盛んな往来を見た。しかし、1937(昭和12)年に現在のJR飯田線が開通するとその道の利用は激減し、1965年頃には日本百名山の著者・深田久彌(1974: 216)が「およそ街道と名のつくもので、これほど寂れ果てた街道も稀だろう。」と記すほどの状況となっていた。

静岡県側も含め、かつては秋葉街道沿いに多くの宿屋があったが、その多くは現在までに廃業している。それぞれの宿に宿帳があったはずであるが、本稿で述べる宿帳を含め残されているものは限られ、しかもほとんどは昭和のものである。

先行研究として大原(1999: 17-22, 2000a: 22-28, 2000b: 25-28, 2000c: 18-24)のものがある。本稿でとりあげる宿帳をはじめ、残されている多くの宿帳について調べている。地元の人々の動きに、より力点が置かれており、宿泊人の細かな住所や、街道の複数の道筋の解明など、地元に通じた研究者の論文となっている。

本稿で取り上げるこの宿帳には、1人1行、1892(明

治25)年の1年間に泊まった429人の10項目の情報が、45頁にわたり記されている。

この情報を詳細に読み、作成した分類表は大原とは異なるものとなった。判読の難しい文字も多く、意見の分かれる点も多い事を指摘しておく。

アーネスト・サトウによる1881(明治14)年の秋葉街道の記述を含め、割合の上では少ないものの、他地域からの宿泊人にも注目して、今や消えゆくままになっている秋葉街道の、1892年当時の往来の一端を明らかにすることが、本稿の目的である。

II 表紙を読む

1. 八重河内村

長野県の東南端、東の3,000mの峰々の南アルプスと、西の2,000mの伊那山脈に挟まれた、南北に伸びる中央構造線が深い谷を造り出している。その谷の一部、北の地藏峠1,323mと南の青崩峠1,082mで区切られた南北25kmの谷が遠山谷であり、遠山郷と呼ばれる地域である(図1, 図2)。山深く森林資源の豊富なこの地は、江戸時代初期の1618(元和4)年より明治になるまで天領であった。北から上村、木沢村、和田村、八重河内村の四つの村が一点に点在していた。八重河内村は遠山谷の一番南、遠州との国境の村である。秋葉街道が四つの村を貫き、国境となる青崩峠を越えて、信州遠山郷と遠州を結んでいた。

明治になり長野県下伊那郡に含まれた。細い谷に点在する地理的にまとまりの悪い4村は、合併や分村を繰り返したが、1960年に八重河内村は和田村などと共に南信濃村となった。2005年、平成の大合併により遠山谷のもう一つの村、上村と共に飯田市に編入合併された。

1867(明治9)年1月1日調べの遠山谷4村の人口は2,922人とある(南信濃村史編纂委員会 1976: 181)。1955年の約8,000人をピークとして減少が続き、飯田市との合併時2005年に2,872人、2017年12月に1,842人¹⁾と、人口減少は止まらない。八重河内村の現在は、長野県飯田市南信濃八重河内地区であり、2017年12月の人口は187人、世帯数は95である²⁾。

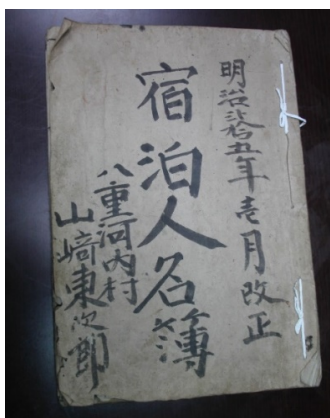


写真1 宿帳の表紙
(筆者撮影)



図1 遠山郷の位置

(遠山郷観光協会より)



図2 対象地域

(国土地理院地図に筆者加筆)

2. 山崎東次郎

山崎東次郎は八重河内村小嵐地区の秋葉街道に沿った地で馬宿を経営していた。1892(明治25)年4月の八重河内村村議会議員8名の中の1人として名前がある(南信濃村史編纂委員会 1976: 245)。この宿帳を記していた4月以降は村会議員であったことになる。1902(明治35)年に亡くなった。

山崎家墓地の墓石を読むと、初代は1731(享保16)年に没している。10代目の現当主、山崎語(さとる)氏によると、4代目の文化文政期(1804~1830年)から馬宿を営んでいたらしい。山崎東次郎は6代目である。

この宿は、遠山郷の中心的な集落の和田(標高400m)



写真2 秋葉街道に面した馬宿

(屋根の下に「信州遠山 島畑」の文字。建物の前が秋葉街道。2012年10月10日筆者撮影)

から、5kmほど離れて1軒だけある宿屋である。標高1,082mの青崩峠まであと3kmの所、標高は580mで峠の麓に位置する(図2)。青崩峠越えを前にした信州最後の宿であり、遠州から青崩峠を越えてくる人にとっては、信州最初の宿である。峠に一番近くにあるという地理的条件が、集落から離れて1軒だけあるこの宿を存続させていた理由であろう。

目的地が秋葉山の場合、飯田から出発する人にとってはこの地がちょうど中間地点となり、昔の健脚な旅人にとって、ここから40km先の秋葉山は1日の行程であった。写真2は2012年撮影の、かつて馬宿として使用されていた建物である。撮影当時は山崎家は同じ敷地内の別棟で民宿を経営していた。屋根の下に「信州遠山 島畑」の文字が見える。島畑はこの地区の小地名であり、もともとは藤屋という屋号であったが、戦前戦中に島畑地区から世帯数が減り、戦後は山崎家1軒となったため、島畑が山崎家の屋号のように使われるようになった。宿帳が書かれた1892年当時は島畑の名前ではなかったのであろう。建物の前の細い道が秋葉街道である。

3. 明治貳拾五年

宿帳が記された明治貳拾五年、1892年はどのような年であったのか年表から見てみたい。括弧内は『南信濃村史 遠山』(南信濃村史編纂委員会 1976)の年表から拾った遠山郷関係の出来事である。

- 1884年 飯田事件³⁾
(飯田事件で遠山の青年数名が検挙)
- 1889年 大日本帝国憲法発布
東海道線 東京神戸間開通
(赤石岳へ一等三角点設置のため、参謀本部



写真3 馬宿付近の秋葉街道

(左側の細い道が秋葉街道。青崩峠を背にして和田の方向を見る。2012年10月10日筆者撮影)

陸地測量部登山)

- 1890年 第一回帝国議会
東京女子高等師範学校設立
(土地・地検作業終了、公簿公図の作成)
- 1891年 大津事件⁴⁾
- 1892年 第2回総選挙
森鷗外「即興詩人」発表
(村議会議員選挙)
(英国人宣教師ウエストンが赤石岳へ登山)
(このころタバコ栽培が盛んに行われる)
- 1894年 日清戦争

自由民権運動が収まり、極端な欧化政策の鹿鳴館時代が終わり、東京神戸間に東海道線が開通し、憲法発布、帝国議会開催と、近代国家としての体裁が整ってきた時代といえるだろう。

III 秋葉街道

1. 塩の道・軍用の道・くらしの道・信仰の道

秋葉街道とは、高遠を起点として、もう一つは飯田を起点として、二つの道が遠山郷の上村で合流し1本となり遠山郷を南下、青崩峠を越えてさらに南下して静岡県の秋葉山までの道を指す。江戸時代は秋葉みちと呼ばれ、明治時代になって秋葉街道と呼ばれた(長野県立博物館 2001: 22)。

中央構造線が作り出す深い谷は、遠山谷の北、地藏峠を越えて大鹿村に通じ、さらに北上して高遠を通過して諏

訪湖に行き着く。古来、太平洋から内陸へ続く天然の通り道であり、塩の道であった(富岡 1978; 宮本 1985; 柳田 1962)。

戦国時代に、2,000mの伊那山地を越えた西側に広がる伊那谷と遠山谷を結ぶために、伊那山地越えの小川路峠1,642mのルートが開削された(南信濃村史編纂委員会 1976: 156)。1572(元亀3)年、武田信玄は甲府を出発して諏訪から伊那谷へ、そして小川路峠を越えて遠山郷に入り、青崩峠を越えて遠州に進軍、三方ヶ原で徳川家康と戦いを交え武田軍が圧勝した。この道は軍用の道であった。

江戸時代、伊那谷にある飯田は2万石の城下町であり、伊那谷南部の物資の集散地でもあった。飯田から牛や馬に荷を付けて小川路峠を越え、遠山郷へ米や酒や必要な物資が送られ、遠山郷からは木材、楮などの山の産物が飯田へ運ばれた(南信濃村史編纂委員会 1976: 156)。この道は遠山郷にとって物流の重要なルートであった。

各地で寺社参りが盛んになると、遠州春野町(現 浜松市天竜区春野町領家)にある、火伏の神として知られる秋葉山秋葉神社への参詣も盛んになった。信州から秋葉山へ行くための道が秋葉みちと呼ばれた。遠山谷はその通り道となり旅人でにぎわった(後藤 1995: 80-83)。

小川路峠、青崩峠、ともに険しい峠道であるが、静岡県と長野県を結ぶ最短ルートであり、人も物も往来する、暮らしを支える道であった。(南信濃村教育委員会 1983, 1984, 1986) (写真3)

2. 1881(明治14)年の秋葉街道

当時の秋葉街道の様子を記述したものとして、イギリス人外交官、アーネスト・サトウ Ernest Mason Satow (1843-1929)⁵⁾のものがある。サトウが38歳の時、1881年7月29日に飯田から遠山郷に入り和田に宿泊し、30日に和田を出発して青崩峠を越えて静岡側に行った。その様子を日記に記している。

サトウの旅の目的は、自身が執筆編集した外国人のための日本の国内旅行の手引書、1881年初版 *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*⁶⁾の次の版に、新たな情報を盛り込むためであった。

その時の記述をサトウの日記から抜粋する(サトウ 1992: 209)⁷⁾。

和田を出発してから

「はじめは青崩峠から流下して来る川床をたつぷり1時間ほど登っていく。道は主に巡礼者たちの足に踏まれて形ができていく。ときどきぼつんと建っている農家の前を通り過ぎていく。…中略…そして左の森の中に入って

登って行く。傾斜は緩やかだが、気温が非常に高いので歩みはのろくなった。時々、崩れかかった絶壁が頭上や前方に見え、峠はその中にある。やがて再び先の急流の川床に出るが、この急流は明らかに洪水時には災害の原因となるだろう。その後森の中に入り、非常にもろい電光型の道を一ヶ所か二ヶ所経て森の中の峠の頂上に至って道は姿を消す。ここからは展望はきかず前も後ろも見通しができない。ここには標柱があって遠州の周智郡の役所までの距離もインチ、さらに十分の一インチに至るまでかなり正確に記入されている。」

実際に次の改訂1884年の第2版に、飯田から遠山郷を通り青崩峠を越えて秋葉山へ行く、秋葉街道のルートが紹介されている。

宿帳が記された1892年は、サトウが旅した11年後のことである。

IV 宿帳を開く

1. 項目

宿帳を開いてみる(写真4)。1人1行に、以下に示した10の項目を記入するようになっている。それぞれの行の上には、1月からの宿泊人数の通し番号がふつである。

- 1 名前
- 2 年齢
- 3 職業
- 4 族籍 県名と平民または士族かが記入されている。429人中、士族は2人、他は全員平民である。
- 5 住所 ・三河國愛知県、美濃國岐阜県、など旧国名が県名の前に記されていることが多い。
・音は同じだが表記が今と違う地名が多数ある。
括弧内が現在の表記。たとえば、師多良郡(設楽郡)羽津郡(幡豆郡)岩田郡(磐田郡)水久保(水窪)等々。
- 6 相貌の特徴 身長と顔の形が記入されている。身長は*尺*寸と記される。顔は、丸顔か長顔かのどちらかが記されている。
- 7 前夜の宿泊所 地名が記されている。地名と共に宿の名前が記されているものも多い。宅と記されているものも多い。
- 8 行き先地 同上
- 9 到着月日時刻
- 10 出発月日時刻

2. 全体を通して気づくこと

- ① 複数の筆跡が認められる。宿の関係者であろう特定複数の人物が、この宿帳に書き入れたものと思われる。



写真4 宿帳を開いてみる

(筆者撮影)

- ② ところどころに鉛筆書き、その下に印鑑が押してある(写真4の左から3行目)。これは警察のチェックである。1年に32回、1カ月に2回から4回のチェックである。印鑑から見ると、毎回同じ人物によるチェックで、12月から違う印鑑となっており、担当者が交代したのだろう。
- ③ 年齢、住所、族籍、相貌の特徴の4項目に記入のない6名がいる。特別扱いである。当時のお上の仕事の特権意識を感じさせる。
4月15日泊 陸軍歩兵一等軍曹
長野県属
長野県測量手吏
11月29日泊 下伊那郡郡書記
下伊那郡郡書記
和田村役場書記
6人とも和田から来てここに泊まり再び和田に戻っている。八重河内村管内で仕事をして和田に戻ったのであろう。4月15日泊の3人は、地図作成の関係者であらう。
- ④ 同じ人物が1年に複数回泊まっている場合は、1人の情報が繰り返されて記載されることになる。429は延べ人数であり、実質の人数はそれよりも少ない。
- ⑤ 連泊の客もいるが、宿泊数に関係なく1行の記載である。
- ⑥ 秋葉詣ではグループで出かける人たちが多く、一番大きなグループは11人である。

3. 男女別年齢構成

男女の記載はなく名前から男女を判断することになるのだが迷う例はない。女性は1割に満たない(図3)。男391人(91%)、女38人(9%)である。

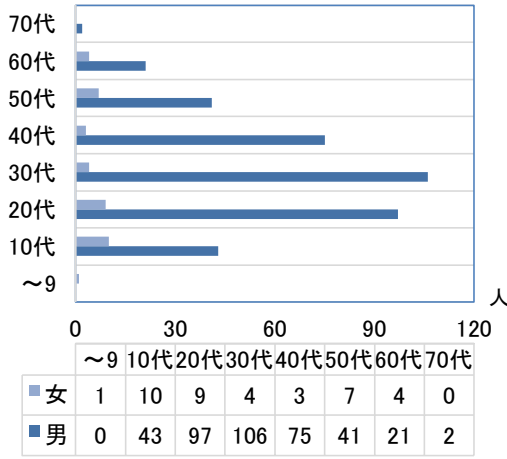


図3 男女別の年代構成

(筆者作成)

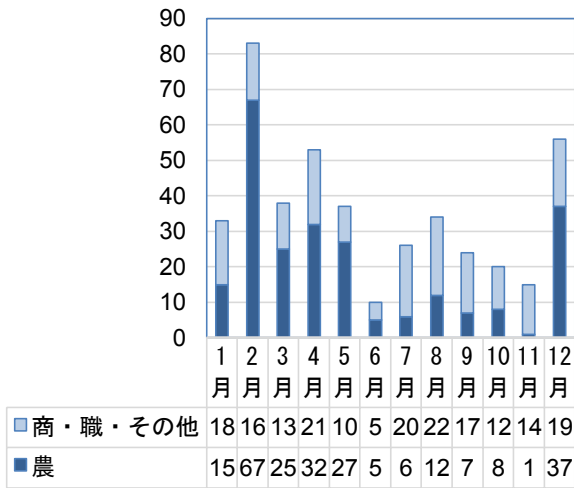


図4 月別宿泊人数(職業別)

(筆者作成)

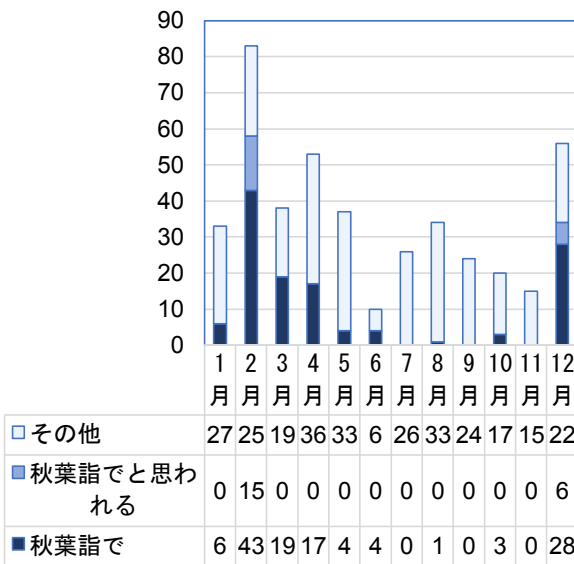


図5 月別宿泊人数(行き先別)

(筆者作成)

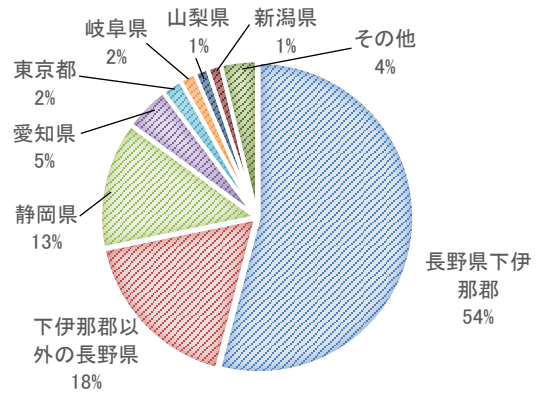


図6 宿泊者の住所

(筆者作成)

男性で一番多い年代は30代, 20代, 40代の順である。女性の場合は, 10代, 20代, 50代の順であり, 女性の30代, 40代が少ないのが, 男性との大きな違いである。主婦が家を空けることがなかったということであろう。30代, 40代の女性は, 多くが夫婦連れの行商人である。最高齢は76歳男性, 次が73歳男性である。最年少は9歳女子, 満で数えれば8歳か7歳, 母と共に東京から来た筆墨商である。

4. 月別人数

図4と図5は月別の宿泊人数のグラフである。図4は月別の人数を職業別「農民」と「商人・職人・その他」との2分類にし, 図5は行き先別「秋葉詣で」「秋葉詣でと思われる」「その他」の3分類にしたものである。

2月の83人が一番多く, 6月の10人が一番少ない。図4から言えるのは, 差を生じさせているのは, 農民の往来の多少である。商人・職人などは, 農民ほどばらつきは少ない。多い2月は農閑期ということであろうし, 少ない6月11月は農繁期ということであろう。

図5から2月と12月は秋葉詣でに行く人で多くなっていることがわかる。宿帳の日付を見ると, 2月は集中する日はないが, 12月は15日と16日の「秋葉の火祭り」と呼ばれる大祭の前後に, 宿泊客が集中している。

「秋葉詣でと思われる」というのは, 行先が秋葉山となっていないが, 秋葉山へ行くまでに途中あと1泊するゆっくりとした行程で行くグループと思われる。

5. 宿泊者の住所

宿泊者はどこから来ているのかをみる(図6)。

なんとといっても多いのが長野県からであり, 7割近い。そこで長野県を「長野県下伊那郡」と「下伊那郡以外の長野県」に分けた。

半数以上が伊那谷南部の下伊那郡から来ている。次に下伊那郡以外の長野県が続く、それから静岡県、愛知県が続く。近い所から多くが来ている。4%となっている「その他」の詳細は、京都3人、徳島・富山が2人、三重・和歌山・茨城が1人である。ほかに住所が未記入の役人・軍人の6人、計16人である。

一番東からは茨城1人、一番西からは徳島2人である。2%にあたる東京9人というのは、遠方であるのに多い数である。

6. 何泊しているか

9割以上の客が1泊である(表1)。ここが目的地ではなく、朝は早く出発して先を急ぐ、どこかへ行くための途中の宿泊という客である。

連泊客の多くは行商人である。宿泊回数が一番多いのは、下伊那郡下久堅村から来る32歳の荒物商で、1年に14回泊まっている。そのうち1泊が7回、2泊が6回、5泊が1回であり、延べの宿泊数は24泊である。ザルや箒など生活雑貨を馬の背に載せて遠山郷内を売り歩く、住民に馴染みの行商人なのであろう。

例外的に18泊もしているのは東京からきた米商と海軍省用達の2人連れである。2回宿泊し、1回目は静岡側から来て1泊して和田に行っている。再びここに戻って18泊している。この近辺で調査や交渉など、なんらかの仕事で滞在したのだろう。海軍のための木材の調達だろうかなどと想像するが、仔細不明である。その後、静岡側に行っている。東京に帰ったのであろう。

7. 宿泊者の移動方向

宿泊客がどちらからどちらへ行くのかを示したのが図7である。

一番多いのが、伊那谷から遠山郷を通過して静岡へ行く、南下する人々である。次が静岡側から遠山郷へ入って、その人たちの多くが小川路峠を越えて伊那谷に入っていく、前者と逆のコースを取る人である。

秋葉山へ行くために南下する人は多いが、帰って来る人はその半分以下である。往路と復路が違っているということだろう。前の宿泊地も次の宿泊地も遠山郷内というのは、多くが遠山郷を廻って商売をする人々である。近い所で泊まっている。

静岡から来てここに1泊して再び静岡へ戻る人もわずかにいる。八重河内村のこの地に用事があったのであろう。

8. 職業

表1 客の宿泊日数

| | |
|-----|------|
| 1泊 | 400人 |
| 2泊 | 21人 |
| 3泊 | 4人 |
| 4泊 | 1人 |
| 5泊 | 1人 |
| 18泊 | 2人 |
| 総数 | 429人 |

(筆者作成)

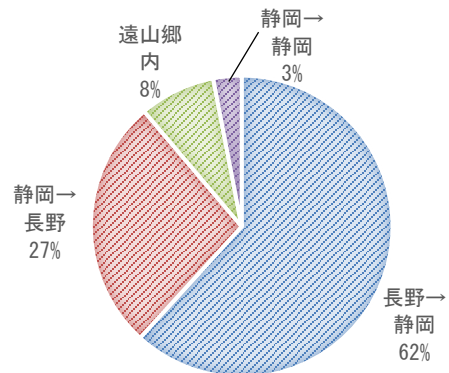


図7 宿泊者の移動方向

(筆者作成)

60余りの職業が記されている。

表2のように分類した。商人の分類では、茶商、青物商となっている職業名の商を省略し、職人も同様に、灰焼き職、下駄職となっている職を省略して示した。数字は人数を表す。長野県内から来ている場合は、県名の記載はしていない。たとえば、1行目「茶2」は、後ろに県名の記載がないので、「茶商が2人、長野県内から来た」の意味となる。2行目の「青物6 愛知3 静岡2」は、青物商が6人、そのうち3人は愛知県から、2人は静岡から、後の1人は長野県内から来た、の意味となる。

その職業に関して付け加えたい情報は斜体字で示した。商人は、茶、青物、菓子、下駄、櫛など、扱う品が絞られ特化している。白木商、材木商などは売るのではなくて、買い付けに来ているのであろう。

富山、京都、東京などの遠方からの商人は、長期にわたり旅をしながら商いをする旅商いの商人であろう。遠くからやってきている商人は夫婦連れが多い。

現在も使われている職業名、教員、大工、僧侶がある一方、現在ではほとんど聞くことのない職業名、目立て職、灰焼き職、弓張職などもある。

下駄の歯の修理をする下駄職人や、臼などの目を立てる目立て職人が来ている。店を構える事なく技術や技を提供しながら旅をしていく、現在はほとんど見ることはない渡り職人と呼ぶ人々であろう(旅の文化研究所2017: 12-14)。

表2 職業一覧

| | | | | |
|------|------------|---|---|---------|
| 商人 | 食品 | 茶 2 | | |
| | | 青物 6 | 愛知 3 静岡 2 | |
| | | 米 2 | 2回の宿泊ゆえ実質は 1人 東京 2 後述 | |
| | | 豆腐 2 | | |
| | | 菓子 10 | | |
| | | 餅 1 | 京都 1 | |
| | | 魚 7 | 愛知 2 静岡 1 | |
| | 衣類 | 古着 1 | | |
| | | 真綿 1 | 山梨 1 | |
| | | 太物 6 | 綿織物や麻織物のこと | |
| | 日用雑貨 | 笠 2 | 京都 2 | |
| | | 袋物 1 | | |
| | | 下駄 2 | | |
| | | こうもり 2 | こうもり傘は新しくおしやれな持ち物であった | |
| | | 櫛 3 | | |
| | | 陶器 3 | 愛知 2 | |
| | | 小間物 3 | 針, 糸, 紐, 髪飾り, 化粧品など 富山 2 | |
| | | 鋳物 1 | | |
| | | 荒物 20 | 箆, ほうき, 塵取り, 桶などの雑貨類 20 の内 14 が同一人物であり最も多く宿泊した人物 伊那谷から来る馴染みの行商人だろう | |
| | | 筆墨 2 | 東京 2 後述 | |
| 金物 2 | | 岐阜 1 | | |
| 鋸 3 | | 岐阜 1 | | |
| 買付け | | 白木 10 | 愛知 4 静岡 3 | |
| | 材木 1 | 静岡 1 | | |
| | 仲買 5 | 何の買い付けか不明だが, タバコ, 楮, 繭などではないか 静岡 3 | | |
| その他 | 蚕種 1 | 蚕の卵を養蚕農家に販売する | | |
| | 葉 2 種 1 | | | |
| 職人 | 弓張 2 | 静岡 2 | | |
| | 陶器 2 | 愛知 2 | | |
| | 大工 6 | | | |
| | 目立て 1 | 臼, 鋸, やすり等のすり減った目を修復 | | |
| | 下駄 7 | すり減った下駄の歯を取り換えた 静岡 7 | | |
| | 塗り物 1 | | | |
| | 灰焼き 1 | 灰は触媒として染め物, 陶器の釉薬等に使われ, 樹種によって灰の成分が違い用途も違っていた | | |
| 宗教者 | 僧侶 1 | | 三重 1 | |
| | 丸山神職 1 | 1873年創設の神道系の団体. 明治10年代に静岡, 愛知, 長野などを中心に隆盛. その神職の意味だろう | 静岡 1 | |
| | 御嶽教道職 1 | 木曾御嶽信仰を元に明治になって発展させた神道系の団体. その布教に従事している人だろう | 愛知 1 | |
| | 芸能 | 菓子芸 1 | 飴細工のようなものだろう | |
| | | 尺八芸 1 | 一番東から | 茨城 1 |
| | | 人形遣い 2 | 一番西から | 徳島 2 後述 |
| | サービス業 | 按摩 1 | | 山梨 1 |
| | | 鍼灸術 1 | | 岐阜 1 |
| | | 賃馬営業 2 | | |
| | | 牛馬営業 1 | | |
| 飛脚 1 | | | | |
| その他 | 旅人宿 2 | | 愛知 1 静岡 1 | |
| | 馬 3 | 仔馬を1年預けて大きくさせ, それを引き取りまた仔馬を預けていく. 馬喰ともいう | 静岡 1 | |
| | 銅山工夫 1 | | 和歌山 1 | |
| | 教員 1 | | | |
| | 労務師 1 | | | |
| | 海軍省用達 2 | 2回の宿泊ゆえ実質は 1人 | 東京 2 後述 | |
| | 無職 3 | | 東京 2 後述 | |
| 軍人 | 陸軍歩兵一等軍曹 1 | | | |
| 役人 | 長野県属 1 | | | |
| | 郡書記 2 | | | |
| | 長野県測量手吏 1 | | | |
| | 和田村役場書記 1 | | | |

(筆者作成)

わずかではあるが, 芸人が来ている. 遠山郷を通過して伊那谷に行ったものと思われる.

9. 遠方からの客

1) 東から

一番東からは茨城県からの尺八芸19歳男性である. 遠方にもかかわらず, 東京からの9人というのが, 多い数で目を引く. 東海道線の開業の影響であろうか. 9人のうち, 米商の山田卯ノ助38歳浅草区小島町11番

地(現 台東区小島)と, 海軍省用達の石川国治郎27歳下谷区御徒町3丁目67番地(現 台東区東上野), この2人は9月11日1泊, 9月15日から18泊の2回宿泊している. したがって東京から来た客は実質7人である.

横山やす37歳と, 三女娘さわ9歳は筆墨商である. 9歳はこの宿帳の中の最年少, 満で数えれば7歳か8歳であろう. 住所は下谷区通り新町61番地(現 荒川区南千住)である. 静岡側から来て, 次の日の宿は小川路峠である. 秋葉街道を遠州から伊那谷に向かっていく.

松浦清直22歳は南豊島郡新宿5町17番地、職業は農とあり、新宿には農地が広がっていたのだろう。

西岡かの23歳とうら18歳の姉妹の住所は、東京本郷菊坂町2番地である。現在の本郷5丁目13～14にあたる。ちょうどその頃菊坂町に住んでいたのが樋口一葉で、一葉は満19歳、小説を書き始めた頃だ。同じ年代のこの姉妹と一葉は、菊坂ですれ違ったことがあっただろうか。女二人連れというのはこの姉妹だけ、無職というものこの2人のほかはあと男性1人だけである。遠山郷の北、上村から来て、3泊して再び上村へ戻っている。何の目的でここに来たのだろう。腑に落ちる理由が見つからなかった。

2) 西から

一番西から来たのは徳島県三麻郡繁清村（現 美馬市）から来た2人連れの人形遣いである。この宿帳の中で、その後の消息が分かったのは、このうちの1人上坂角太郎24歳である。

阿波・徳島は人形浄瑠璃の盛んな土地柄で、徳島県内に農村の神社などで興行を行う座が70以上あったといわれる。それらの座による興行ではなく、箱の中に何体かの人形を入れ、それを天秤棒で担ぎ、道端で演じたり、家々を廻る門付け芸として、「箱回し」と呼ばれた二人組の放浪芸があった。浄瑠璃の舞台では3人で繰る1体を、箱回しでは1人で扱った。明治の初めの盛んな時には、徳島県吉野川沿いに200人くらいが、全国を歩き、昭和10年代まで行われていた（徳島県立博物館 2015: 26）。

上坂角太郎24歳と新田竹ノ丞33歳も、箱回しの二人組であったのだろう。阿波を出て、1892年11月2日、静岡県側から青崩峠を越えて遠山郷に入り、この宿に1泊、翌3日和田に向けて出発した。それから伊那谷に入り、伊那谷を北上、中山道に入って碓氷峠を越えて群馬に入った。

上坂角太郎はその後、群馬県赤城山の麓で「赤城人形大芝居」という座を立ち上げ、人形の頭を約30徳島から取り寄せ、関東大震災の頃まで関東を中心に興行していたことが分かっている。当時、生糸で景気の良かった群馬に腰を落ち着け、座を立ち上げたのであろう。1955年になって、群馬県勢多郡荒砥村字泉沢（現 前橋市）の神社の倉庫に、15の人形の頭が保管されていることが分かった（大原 2000c: 18-24；大和 2012: 187-189）。

V おわりに

田中啓爾が1957年に著した「塩および魚の移入路—鉄道開通前の内陸移入路」で展開した内陸部の交通の、一

つの実例をこの宿帳が示している。

秋葉街道と言われるが、秋葉山への参詣者は半数以下で、しかも季節的な偏りが大きい。

近場を移動して泊まるのは、遠山郷内で商売をする商人や職人である。暮らしを支える行商人や渡り職人たちの往来が多い。今は見ることのない職業、特に職人の多さが、道具類を直しながら使っていた当時の暮らしを偲ばせる。

長野から静岡へ南下する人が6割、静岡から長野へ北上する人が3割弱、ということは同じ道を帰ってくる人は少ないということだ。

遠方から、東京、新潟、富山、徳島などからの客が1割強を占めている。それは東海道線開通の影響なのか、または以前からの事なのか、その点は不明である。

また、イギリス人のアーネスト・サトウが、1881年の秋葉街道の様子を記している。秋葉街道の貴重な記録である。11年後の1892年の秋葉街道の様子も、その記述から推測される。

補遺 秋葉街道の今

伊那谷における鉄道敷設（現 JR飯田線）が進むにつれ、徐々に人の移動も物流も鉄道にとって代われ、1937（昭和12）年の全線開通後はさらにこの道の利用は激減し、忘れられた道となって今日に至った。秋葉街道の今をここに補遺として書き添えておく。

1. 兵越峠の国盗り綱引き

国道152号線という国道でありながら、青崩峠を越える道は車の通行不可で、歩いて越えるしかない。車は1973年開通の舗装道路、青崩峠の東に位置する標高1,165mの兵越峠を越えて、静岡側に行くことになる。

兵越峠で、1987年から毎年10月第4日曜に「峠の国盗り綱引き合戦」というユニークなイベントが開かれている。2018年に32回目を迎える（写真5）。

峠を挟んで向かい合う、静岡県側の旧水窪町（現 浜松市天竜区水窪地区）と、長野県側の旧南信濃村の青年たちが峠に参集し「太平洋をとるか、諏訪湖をとるか」というスローガンの下で綱引きをする。長野県側が勝てば1m太平洋側に、静岡県側が勝てば1m諏訪湖の方に、国境を移動させるというもの。もちろん本当の県境が動くわけではないが、国境を巡って毎年楽しい攻防が繰り広げられる。

日頃は通る車もまばらなひっそりとした県境の峠がこの日は双方から上って来た人で埋まる。陣羽織姿の武将に扮した浜松市長と飯田市市長も参加して、イベントを盛



写真5 国盗り綱引き

(2016年10月23日撮影 遠山郷観光協会提供)



写真6 国盗り綱引きの結果 国境の移動

(「国境」の立て札を支えている浜松市長と、木槌で立て札を打つ飯田市長。綱引きの勝負が終わって「国境」を移動させている。2016年10月23日撮影 遠山郷観光協会提供)

り上げる(写真6)。このイベントのために峠近くに「国盗り公園」も作られた。

2014年に、地域の文化向上と活性化に貢献した個人や団体に贈られる、第36回サントリー地域文化賞を受賞した。受賞理由は「行政区画で隔てられた隣接する二つのまちが、大人の遊びとしての〈綱引き〉に真剣に取り組むことで、かつての交流を取り戻しつつあることが高く評価された。」⁸⁾ というものだった。

青崩峠と、この兵越峠を通過して、1572(元亀3)年武田信玄率いる2万とも3万ともいわれる大軍が遠州に進軍し、浜松城の徳川家康と三方ヶ原で戦ったという史実があり、江戸時代以降、秋葉街道を盛んに往来していた一時代があったという歴史的経緯があつてこそ、新しいイベントが皆に受け入れられ定着した。過疎に悩む山深い県境の2地区が生み出した、新しい文化であろう。

2. 観光資源としての可能性

2016年10月、水窪地区と遠山郷地区の人々によって、静岡県側から青崩峠を越えて遠山郷へ10kmの距離を歩い

ていくという第1回の「青崩峠古道歩こう会」が開催された。定員150名を超える予想以上の希望者で、早速2017年4月に第2回目が開催された。

飯田から遠山郷へ入る小川路峠越えのコースも、廃道になっていたが、近年整備が進みハイキングコースとして楽しめるようになった。

沿道には道標、馬頭観音、地藏、茶屋の跡、無人になった家々など、盛んであつた往來を偲ばせるものが数多い。解説の案内板の設置や、ガイドの養成など、ハードソフト両面で整備すれば、熊野古道などの街道歩きのように観光資源として十分活用できるだろう。

3. 三遠南信自動車道と馬宿・山崎家

現在、新東名高速道路の浜松いなさジャンクションと中央自動車道の飯田山本インターチェンジを結ぶ約100kmの三遠南信自動車道の建設が進められている、一部の区間は開通しているが、全線開通の時期は未定である⁹⁾。この自動車道はかつての秋葉街道の道筋と重なる部分もある。静岡、愛知、長野3県の県境の山間地域の人々が期待するところは大きい。

山崎家の馬宿の地が、三遠南信自動車道のルート上の、青崩峠の下を通るトンネルの出口付近にあたり、道路用地となることが決定した。そのため、2007年からは3kmほど和田に寄ったかつての八重河内小学校跡地にて、新たな宿の営業も開始した。

2014年3月の青崩トンネルの起工式を前にした1月、家屋解体と整地が行われ、写真2、写真3の光景はなくなった。そして、営業中の宿の隣に、住まいも墓地も移転して、一家は新しい暮らしをスタートさせた。

本稿で扱ったこの宿帳は、遠山郷和田にある遠山郷土館に寄贈された。

謝辞 2010年12月遠山郷に伝わる霜月祭りを見に行つた折、山崎語(さとる)さんに今は取り壊されて跡形もなくなった、秋葉街道沿いのかつての馬宿に案内していただき、そこでたまたま目にしたのがこの宿帳だった。その後改めて宿帳をじっくり見る機会を得て、詳細に調べることが出来た。山崎さんをはじめ、遠山郷観光協会、住民の方々に、多くの事を教えていただいた。皆様に心からの感謝の気持ちをお伝えしたい。

注

- 1) 飯田市役所 住民基本台帳による。
- 2) 飯田市役所 住民基本台帳による。
- 3) 愛知、長野両県の自由民権派による明治政府転覆の挙兵計画。

未遂に終わった。

- 4) 滋賀県大津において、来日中のロシア皇太子が襲われ頭部に傷を負った事件。
- 5) サトウは幕末1862（文久2）年に通訳として来日、以来幕末から明治維新の激動の日本外交の最前線に身をおくこととなった。滞日25年を数え、英国の日本研究の開拓者ともなった。代表的な著書は邦訳『一外交官の見た明治維新』岩波文庫。
- 6) 日本語訳（サトウ 1996a, b, c）は3巻に分冊されており、1884年の改訂第2版を訳したものである。
- 7) 『日本旅行日記』として1と2が邦訳出版されているが、これは英国の国立公文書館に所蔵されているサトウ文書の中の一部、日本旅行にかかわる日記のいくつかを取り上げ訳出したものである。
- 8) 飯田市webページ『『峠の国盗り綱引き合戦』が『第36回サントリー地域文化賞』を受賞することになりました。』。
<https://www.city.iida.lg.jp/soshiki/34/tougenokunitori.html>（最終閲覧日：2017年12月30日）
- 9) 国交省中部地方整備局浜松河川国道事務所webページ「三遠南信自動車道」。 www.cbr.mlit.go.jp/hamamatsu/road/route474/（最終閲覧日：2017年1月15日）

文献

- 大原千和喜 1999. 秋葉道に寄せる人々の心ー宿帳を通して見る“あきはみち”（1）. 伊那 47(9): 17-22.
- 大原千和喜 2000a. 秋葉道に寄せる人々の心ー宿帳を通して見る“あきはみち”（3）. 伊那 48(3): 20-28.
- 大原千和喜 2000b. 秋葉道に寄せる人々の心ー宿帳を通して見る“あきはみち”（4）. 伊那 48(6): 25-34.
- 大原千和喜 2000c. 秋葉道に寄せる人々の心ー宿帳を通して見る“あきはみち”（6）. 伊那 48(11): 18-24.
- 後藤総一郎 1995. 『遠山物語』筑摩書房.
- サトウ, A. 著, 庄田元男訳 1992. 『日本旅行日記1』平凡社.
- サトウ, A. 編著, 庄田元男訳 1996a. 『明治日本旅行案内 上巻 カルチャー編』平凡社.
- サトウ, A. 編著, 庄田元男訳 1996b. 『明治旅行案内 中巻 ルート編I』平凡社.
- サトウ, A. 編著, 庄田元男訳 1996c. 『明治日本旅行案内 下巻 ルート編II』平凡社.
- 田中啓爾 1957. 『塩および魚の移入路ー鉄道開通前の内陸交通』古今書院.
- 旅の文化研究所 2017. 『旅の民俗シリーズ第1巻 生きる』現代書館.
- 徳島県立博物館 2015. 『阿波木偶箱まわしの世界ー門付け, 大道芸』徳島県立博物館.
- 富岡儀八 1978. 『日本の塩道ーその歴史地理学的研究』古今書院.
- 長野県立歴史館 2001. 『歴史の宝庫 秋葉みちー信遠古道をたどる (文化財保護法50年記念・秋季企画展)』長野県立歴史館.
- 深田久彌 1974. 『山の文学全集IV』朝日新聞社.
- 南信濃村史編纂委員会 1976. 『南信濃村史 遠山』南信濃村.
- 南信濃村教育委員会 1983. 『ふるさとへの伝言 高齢者の語り 第1集』南信濃村教育委員会.
- 南信濃村教育委員会 1984. 『ふるさとへの伝言 高齢者の語り 第2集』南信濃村教育委員会.
- 南信濃村教育委員会 1986. 『ふるさとへの伝言 高齢者の語り 第3集』南信濃村教育委員会.
- 宮本常一 1985. 『塩の道』講談社.
- 柳田國男 1962. 東国古道記. 柳田國男『定本 柳田國男集第2巻』233-264. 筑摩書房.
- 大和武生 2012. 『阿波人形浄瑠璃物語』徳島新聞社.

いそまえ・むつこ（26期卒）

Travelers on Akiba Road in Tōyama-gō, Nagano Prefecture, 1892: List of Guests in the Inn Register Book

ISOMAE Mutsuko